

第 18 回 木津川上流河川環境研究会 議事要旨

【開催概要】

開催日時：平成 23 年 2 月 15 日（火） 10：00～12：30

開催場所：大阪マーチャンドライズ・マート（OMM ビル） 2F 5 号会議室

【出席者】

委員：5 名

事務局：木津川上流河川事務所（5 名）

オブザーバー：水資源機構関西支社（1 名）、木津川ダム総合管理所（2 名）

【議事次第】

1. 開 会
2. 挨拶
3. 研究会前回議事の確認
4. 議 事
 - 堰・魚道 WG の開催概要について
 - 樹林管理 WG の開催概要について
 - 木津川上流管内 河川環境目標について
 - フラッシュ放流・土砂供給試験について
5. 閉 会

「配付資料」

- ・資料-1 ワーキング等開催概要
- ・資料-2 堰・魚道 WG 開催資料
- ・資料-3 樹林管理 WG 開催資料
- ・資料-4 木津川上流管内 河川環境目標について
- ・資料-5 平成 22 年度フラッシュ放流・土砂供給試験について
- ・参考資料-1 第 17 回 木津川上流河川環境研究会議事要旨
- ・参考資料-2 参考資料：河川環境の変遷 等

【審議内容】

○研究会前回議事の確認

事務局より、「参考資料-1 第 17 回木津川上流河川環境研究会議事要旨」の説明を行った。議事の主な内容は以下の通りであった。

- 1) 前回研究会から時間が経過している。議事概要はホームページにアップするのであるから鮮度が重要であり、今後は研究会終了後速やかに内容の確認作業を行うものとする。

○堰魚道ワーキングの開催概要について

事務局より、「資料-2 堰・魚道 WG 開催資料」の説明を行った。議事の主な内容は以下の通りであった。

- 1) ナルミ魚道の簡易改良については詳しく調査を行い、効果を確認したうえで他の箇所にも拡大していくことが考えられる。
- 2) 遡上アユの検討については、三川合流や木津川下流の区間において、淀川河川事務所と連携して実施することが必要であり、また、海産系の判別手法は、耳石分析以外の体長による判

別等、安価な手法によることも検討して頂きたい。

- 3) 木津川にアユが遡上していないのであれば、何がバリアになっているのか調査していく必要がある。また、遡上しないのであれば、ターゲットをアユ以外のものにするのかどうかについても考えていく必要がある。
- 4) 木津川上流まで遡上しないことについては、木津川の河川環境自体の変化による影響など、広い観点からの検討も必要と考えられ、その上で、相楽・大河原発取水堰による障害をどうするかといった全体的な図式の把握が必要である。
- 5) 相楽、大河原発取水堰の連続性障害について、アユ以外の魚種についてもその影響を検討し、取り組み方法の再構築が必要と考える。
- 6) 上野遊水地の再生対策で、先行的に実施していく箇所は具体的にどこを予定しているのか。→大坪排水樋門を想定しており、今ある良好な河川環境を活かしつつ、落差の解消、水深の確保等、対策を実施していきたいと考えている。

○樹林管理ワーキングの開催概要について

事務局より、「資料-3 樹林管理 WG 開催資料」の説明を行った。議事の主な内容は以下の通りであった。

- 1) 土壌調査によってタケ類の回復力のようなものは評価可能か。
→定性的には評価できると考える。また、地上の調査とセットで評価するという意味でも有効である。
- 2) 冠水頻度による評価は狭いモデル区域のような所で評価することも考えられる。
- 3) 湿潤状態にするとタケは窒息するので冠水させるのは有効かもしれない。
- 4) 冠水させる対策については、効果はあると思うが実現可能性の問題がある。
- 5) 益田川ダムの事例で試験湛水時にタケが水没して枯死したという知見はある。
- 6) タケ群落の中にクリークを掘るような方法なら実現可能性があるかもしれない。
- 7) クリークを掘ってもタケはクリークのないところに伸びていくという性質を持っている。
- 8) 堰をつくるなどして常に水に浸かるようにする方法が考えられる。
- 9) 効果に加えて費用との組合せもあるので、種々の方法を引き続き検討していく必要がある。
- 10) 河川区域全体に占めるタケの面積などを考えて評価することも重要と考える。
- 11) アウトプットだけでなくアウトカムといっしょに見ながら示していきたい。
- 12) 樹林の分布、どの程度流水阻害が緩和されるのかといった当初の議論と連動して、引き続き進めて頂きたい。

○木津川上流管内 河川環境目標について

事務局より、「資料-4 木津川上流管内 河川環境目標について」の説明を行った。議事の主な内容は以下の通りであった。

- 1) 目標の参考イメージとして、名張市の川に係わる昔の景観の写真が示されているが、アンケートの実施等、まず市民の意見をきくことから始める必要がある。
- 2) 砂礫河原の再生は全国で失敗していることから困難ではないか。再生の手法等、合わせて検討しておく必要がある。
- 3) 流域の森林は現在保全が進み裸地はほとんど残っておらず、土砂が流出しなくなって来ており砂礫河原の再生は困難と考える。
- 4) 木津川本川名張川合流点下流ブロックの検討にあたっては、淀川河川事務所との連携が必要である。このブロックでは、昔に比べ砂州が減少しており、また近年新たな砂州ができたりもしており、土砂環境のあり方等、重点ブロックとして位置付け、今後どうしていくのかということを検討していくことがよいのではないかと。
- 5) 名張盆地ブロックは、名張市内にとって大事な区間であると考えられ、今後重点ブロックとして位置づけてよいのではないかと。
- 6) 今後はブロックの重点度や取り組みの強弱をつけていくことが考えられる。
- 7) 住民意見をどのように聞くかが課題である。案を提示して意見を頂く、あるいはアンケートを行う等、どのような仕組み・方法で実施するかを議論しておく必要がある。

- 8) これまでこの研究会は問題解決型で進めてきたが、そろそろ“場”での議論を進めた方がよいと思う。3 ブロックぐらい重点ブロックを定めて、例えばワークショップの開催などにより、今後どういう施策を実施すればいいかを検討していくことが考えられる。
- 9) 昔と今では生活形態も変化しており、目標としてかつての状況に戻すことを掲げることが現実的なのかどうか調べておく必要がある。
→名張川についてのワークショップを開催したことがあり、その中では環境に関する意見もあった。目標については、それら意見なども踏まえながら、徐々に形成していくものではないかと考える。

○資料-5 平成 22 年度フラッシュ放流・土砂供給試験について

(独)水資源機構より、「資料-4 平成 22 年度フラッシュ放流・土砂供給試験について」の説明を行った。議事の主な内容は以下の通りであった。

- 1) 放流の重ね合わせの結果、剥離・洗浄効果が高まり、よい結果が得られている。
- 2) 流量ピークの時より立ち上がり部分で濁度ピークが出ており、立ち上がり部分の差で洗浄効果が発揮されていると考えられる。
- 3) 立ち上がりの速度は、河川管理上、恐らく1時間に60センチぐらいが限界であると考えられ、その場合の効果が把握できたという意味で、大きな成果であるといえる。
- 4) 土砂供給に使用する土砂の性状等、確認しておくことが必要である。

以 上